慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コーリン・ストーンマン編著『ジンバブウェの相続』
Sub Title	Colin Stoneman ed., "Zimbabwe's inheritance"
Author	井上, 一明(Inoue, Kazuaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1985
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.58, No.3 (1985. 3) ,p.113- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19850328-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Colin Stoneman ed.,

Zimbabwe's Inheritance

London, The Macmillan Press Ltd., 1981, 234 p.

コーリン・ストーンマン 編著

『ジンバブウェの相続』

一

一九八〇年四月一八日、過去九〇年間にわたって少数白人支配体制を堅持してきたローデシアは、歴史の舞台からその姿を消し、かわって多数支配にもとづくジンバブウェが誕生した。

独立総選挙において圧倒的な勝利を収めたジンバブウェ・アフリカ民族同盟（ZANU）は、野党第一党であるジンバブウェ・アフリカ人民同盟（ZAPU）との連立政権の樹立、そしてその実質的な崩壊を経て、現在、合法的な手続きによる一党制への移行をめざして準備を整えつつある。このことは、一九八四年八月八日から一〇日にかけて、二〇年ぶりに開かれた第二回ZANU党大会においてもはっきりと打ち出された。同大会において首相ムガベは、一党制国家の樹立と社会主義革命の達成を公約し、また大会決議においても、この二つの目標が確認されたのであった。

このようにムガベ政権は、一党制支配と社会主義社会の実現を前面に押し出してはいるが、少なくとも後者の目標に関しては、現在のところ順調に進展しているとはいえない。むしろジンバブウェは、ローデシアから受け継いだ社会、経済的な体制を部分的に手なおしするといった、いわば現実主義的な路線を歩みつつある。そしてこうした傾向は、一九八三年一一月に発表された「国家暫定開発計画」のなかに端的に表われている。この開発計画において「社会主義社会の実現」が、国家的目標として位置づけられていることはいうまでもないが、これはいわば長期的目標であって、社会主義への移行に関する具体的な方策は、そのなかに何ももり込まれていない。むしろこの開発計画の力点は、商業農業、製造業、そして鉱業などのローデシアの経済的遺産を基本的には穏存することとして、当面は高度成長をめざし、その枠内で可能な限り分配の公平化をはかる、というところに置かれているのである。

それではなぜ、ムガベ政権は、こうした現実主義的路線を採用したのであろうか。この問題に対する解答を見いだすためには、現在ジンバブウェが置かれている政治的、経済的そして社会的な状況を幅広く分析することが要求されるであろう。ここに紹介する『ジンバブウェの相続』は、この国がローデシアか

ら受け継いだ政治的、経済的、そして社会的な遺産について各分野の専門家が執筆した論文集であり、先に提示した問題を解明する際の有力な手がかりとなるものである。なお、類書としては内戦の末期にUNCTADが作成した『ジンバブウェ――新秩序に向けて』、そしてモーリス・ジョーンズ編『ローデシアからジンバブウェへ』などを上げることができる。

次に本書の執筆者を簡単に紹介すると、編著者であるコーリン・ストーンマンは、現在、ジンバブウェ大学の上級客員研究員であり、第一、六、七、そして九章を担当している。第二章の執筆者ライオネル・クリフは、リード大学の講師、また第三章の執筆者コーンラード・ブランドは、ジンバブウェ大学の講師である。第四章の執筆者、ムデレリ・カダーニとロジャー・リッデルは、独立直後、政府が設置した「賃金諮問委員会」に属していた。ローレンス・ハリス（第五章）は、オープン大学、ロブ・デーヴィス（第六、一〇章）は、ノース・スタッフォードシェアー工芸大学、そしてデヴィッド・ウィールド（第八章）は、リード大学でそれぞれ教鞭を取っている。なお執筆者に共通する特徴は、彼らがジンバブウェおよびその周辺地域の現地経験を豊富にもっているということである。

本書の内容は次のとおりである。一、序論、二、ジンバブウェの政治的相続、三、不平等社会の分析、四、教育、五、不平等の再生産――税制と社会秩序、六、経済――概観――、七、農業、八、製造業、九、鉱業、一〇、外国貿易と対外経済関係。

なお、巻頭には、ジンバブウェ教育・文化相ムトゥンブカによる序文が、また巻末には詳細な文献リストが付されている。

それでは次に、評者の問題意識に関連させつつ、本書の内容を重点的に紹介してみたい。

二

ジンバブウェの現代史（政治史、経済史）は、これまでさまざまな視点から研究されてきた。その視点とは、たとえば白人ないしは黒人の側に立った視点、あるいは国際的な視点といった具合であるが、これらの視点に共通しているのは、その現代史を白人と黒人の相互関係、または対立関係として把握していることであり、その前提として白人と黒人をそれぞれ一つの人種グループとみなしていることである。これに対して、ジンバブウェの政治経済史の分析に階級的な視点を導入したのがアリギであった。(1) 彼は、かつてのローデシア社会の階級的性格を分析することによって、白人農村ブルジョワジーが支配的な地位にあることを明らかにしたのであるが、本書の第一章で簡単に述べられている歴史的背景や、第二章の前半は、ほぼこのアリギの議論に即して展開されている。クリフは、第二章において、「白人の団結は、永久かつ不変なもの」ではなく、状況によって変化するような「単なる歴史的な同盟」にすぎず、白人右派政党、ローデシア戦線（RF）が政権の座に就くことができたのは、低賃金労働制度の存続を必要とした白人労働者、プチ・

ブルジョワジー、そして農業資本家の支持を得たためであった、と指摘する。

このようなクリフの分析が、「社会分析における人種と階級相方の重要性」という第一章におけるストーンマンの提言との関連で言えば、むしろ階級に力点を置いているのに対して、第三章から第五章までは、人種に力点を置いたアプローチによって、ローデシア時代の社会構造、教育、そして税制を、統計資料にもとづいて詳細に分析している。

ジンバブウェにおける種族集団の問題は、社会学的見地ばかりではなく、政治学的見地からもきわめて興味深い問題である。なぜならば、現在の議会における各政党の議席配分は、この国の種族の人口比に一致しているからである。したがって、今後、ジンバブウェが種族を越えた国民的一体性を生みだすことができるか否かは、きわめて重要な問題であろう。第三章においてブランドは、種族的意識、あるいは地方的意識とは根元的なものというよりは派生的なものであって、社会、経済的な環境によって形成される、と述べるとともに、アフリカ人のアイデンティティーは、固定的なものではなく可変的なものであって、外的要因によって操作されうるものである、という興味深い指摘を行なっている。さらに彼は、白人政権に反対する連帯感や、部族主義に対する否定的な宣伝活動が、アフリカ人のあいだに種族や地方を越えた心理状態を生みだした可能性がある、と述べている。

ところで、ジンバブウェが相続した遺産の一つの特徴は、人種的不平等を生みだした社会、経済的な二重構造である。そしてこの二重構造が法的制度として確立していたのが、教育と税制の分野である。

第四章においてカダーニとリッデルは、教育制度が白人と黒人のあいだの社会、経済的差別を確立し、維持するための主要な道具であったことに着目して、それが単に黒人に対する教育の普及を遅らせたばかりではなく、雇用構造に直接的な影響を与えた、と指摘する。そのため、ジンバブウェの教育問題は、単に白人に対する教育上の優遇措置を撤廃し、黒人のための教育施設を拡充するだけでは解決したことにはならないのであって、ローデシア時代の学歴偏重的な社会構造の改革、また単なるアカデミックな知識の習得をめざした教育ではなく、大多数の黒人が居住する農村の現実的な要請に応えるようなカリキュラムの編成、そして熟練工を育成するための職業訓練システムの充実などが教育改革の根幹となるべきことを、著者は訴えている。

他方、第五章で扱われる税制における二重構造は、これまであまり取り上げられることのなかったテーマであり興味深い。ハリスによれば、ローデシア時代の税制と財政は、「自己財源の原則」によって規定されていた。すなわちこれは、白人と黒人に対する公共サービスは、それぞれの人種の総納税額に応じてなされねばならない、というものである。そのため納税額の

少ない部族信託地のアフリカ人農民は、まったく補助金を受けることができなかったのであり、他方、白人農民に対しては、直接、または間接的に補助金が支給されたのであった。従来、こうした補助金の支給が、白人農業を大きく発展させた一つの原因としてみなされていたが、著者によれば、白人農園主の三〇パーセントは、その総収入が所得税の課税水準に達せず、補助金の支給とその他の公的援助は、まさにこれらの白人農園を存続させるために行なわれたのであった。そしてハリスは、これが、RFを支持する小規模農園主を、その土地につなぎ止めておくための政治的手段であったと指摘している。

本書の後半部分は、ジンバブウェが受け継いだ経済全般にわたる概観、およびこの国の経済の主要な生産部門である農業、製造業、鉱業、そして最後に外国貿易に関する分析が、それぞれの分野の専門家によってなされているが、分析の力点は、一九六五年から一九七九年までの、いわゆる一方的独立宣言（UDI）期に置かれている。

このUDI期は、ジンバブウェの経済が、国連の経済制裁下にありながらも急速に成長を遂げた時期であるが、ストーンマンとデーヴィスは第六章において、この時期のプラス面とマイナス面を次のように分析している。すなわちプラス面は、製造業の重要性の増大、インフラストラクチャーの発展、外国貿易と資本の流入の重要性が低下したことによる対外依存の減少などであり、マイナス面とは、内戦による被害と経済崩壊、白人と黒人のあいだの賃金格差の増大、失業者の増大、そして部族信託地における人口過剰であった。ストーンマンは、こうしたUDI期の全般的な特徴を踏まえながら、経済に対する国家の積極的な介入、金融部門の急速な発展、そして経済全般にわたる外国資本の支配的性格といった諸問題を分析したのちに、経済的独立に向けての一つの処方箋を提示している。これは一言でいえば、三年から一〇年の移行期間を設定した、企業の労働者管理による共同組合化であり、著者によれば「国際資本主義に対する全面的な従属」ないしはそれとの「悲劇的な全面対立」を避けるための第三の道である。

周知のように、ジンバブウェは、ローデシアからかなり発達した商業農業、製造業、そして鉱業を相続したが、現在、政府がもっとも積極的に取り組んでいるのが商業農業を含めた農業部門の改革である。その理由は、総人口の約八〇パーセントが農村部に居住して農業で生計をたてていることにもよるが、それに加えて、この部門において、もっとも顕著な形の二重構造が存在するためであろう。すなわちそれは、ヨーロッパ人農業部門とアフリカ人農業部門、言葉をかえていえば、商業農業部門と自給的農業部門という二重構造である。ストーンマンは第七章において、この農業における二重構造を踏まえながら、前者を白人セトラーと外国所有の大規模プランテーション、そして後者を部族信託地とアフリカ人購入地に細分化して分析し、ヨーロッパ人農業部門における総生産の約六〇パーセントが、

大規模プランテーションによって生産されたことを明らかにしている。このことは、第五章で指摘されている補助金によって支えられた白人小規模農園の実態とあわせて、ヨーロッパ人農業部門に対する政府の今後の政策を予測するうえで重要なポイントとなるであろう。

製造業は、それが他の生産部門との比較ばかりではなく、他のブラック・アフリカ諸国のそれとの比較においても、相対的に大規模である、とウィールドが第八章で述べているように、ジンバブウェ経済の大きな特徴となっている。この分野は、UDI以降の時期に急激に発展したが、その原因は、著者が指摘しているように、白人政権が経済制裁に対抗すべく、輸入代替政策を積極的に推進したためである。本章では、こうした製造業の歴史的な発展過程を跡づけるとともに、政府の統計書に即して製造業を一三の分野に大別し、それぞれの分野を評細に分析している。

鉱業は、GDPに占める割合が八パーセントであり、農業の一七パーセント、製造業の二四パーセントに比べて低いが、ストーンマン（第九章）によれば、むしろこれは、ジンバブウェ経済の比較的バランスのとれた性格を示すものである。また本章でも述べられているように、約四〇種類にもおよぶ鉱産物が産出されていることも、この国の鉱業の大きな特徴であるといえよう。しかしながら、採掘された鉱産物の九〇パーセント以上が輸出されていることから、鉱業は、先進世界のための「輸出用の飛び地（export enclave）」である、と著者は指摘している。また、ストーンマンは、雇用者が熟練工としての能力のあるアフリカ人を未熟練工、ないしは半熟練工の資格で雇うことによって賃金を抑え、実際には熟練職に就けていた事実を踏まえて、鉱業労働者に関するかぎり、現在必要な技術の大半は、アフリカ人労働力によって賄うことができるであろう、と主張している。

最後に、第一〇章の外国貿易であるが、デーヴィスは、UDIに至る時期の貿易全般の傾向を、輸出に関しては、鉱産物から農産物を経た製造品への転換として、また輸入については、白人のための消費財から生産財への転換として把握している。また、貿易相手国も、イギリスへの依存から多様化され、南ア共和国が重要な貿易相手国となった。著者によればUDI期における貿易は、輸入が年平均四・一パーセント、そして輸入が年平均五・六パーセントの伸び率を示した。またこの時期の貿易相手国は、白人政権がそれを公表しなかったために確定することができないが、デーヴィスは、日本、西ヨーロッパ、アメリカが、貿易における比重を増したと指摘している。

（1） G. Arrighi, *The Political Economy of Rhodesia*, Mouton, The Hague, 1967.

三

本書は、新生ジンバブウェが相続したローデシアの政治、経

済、そして社会的遺産を、各分野の専門家が詳細に分析した貴重な論文集であり、その内容は単なる概観に終わらず、教科書のレベルを陵駕するものである。したがって、本書の各章にわったてコメントを加えることは、政治史を専攻する評者の能力をはるかに越えている。

しかしながら、強いていえば、まず本書全体については、「社会分析における人種と階級相方の重要性」という序論（第一章）のなかのストーンマンの提言が、第二章を除いてあまり生かされていない、ということである。読者は、本書を通じてローデシア時代の階級的な社会、経済構造よりもむしろ、白人と黒人という人種に立脚した社会、経済的二重構造を鮮明に理解することができるであろう。また、これに関連していうならば、農業、製造業、鉱業を扱った各章（第七章～九章）が、その大半を、階級的な視点にとらわれず、統計資料にもとづく実証的な分析に当てているにもかかわらず、各々の結論部において労働者管理による社会主義体制の確立を主張していることは、その文脈からみていささか論理的な飛躍が感じられ理解に苦しむ。

しかしながら、こうした点は末梢的なものであり、あるいは評者の誤読によるものであるかもしれない。いずれにしても、本書は、現在、ジンバブウェが置かれている状況、そして、とりわけムガベ政権の現実主義政策の背景を理解するうえで、非常に有益なものである。

（執筆にあたっては、アジア経済研究所『発展途上国直接借款推進基礎調査――ジンバブウェ――報告書』昭和五十九年三月を参照した）。

井上一明